

北は北海道から南は沖縄まで、現在も27校の国公私立大学が管理する大学演習林が全国各地に設置されています。大学演習林は、先進的な林業経営を行い、林業技術の発展に貢献してきました。国内初の大学演習林が、浅間山（千葉県鴨川市清澄）で、東京大学大学院農学生命科学研究科附属千葉演習林（以下、東大千葉演習林）の一部を構成しています。大学演習林発祥の地という点が評価され、2013年度の林業遺産に選定されました。



日本における林学高等教育の歴史は、1882(明治15)年に東京・西ヶ原に開校した東京山林学校から始まりました。後に林学の父とも称された本多静六(1866〜1952)も、1884(明治17)年に、東京山林学校の門戸を叩きました。1886(明治19)年7月、財政難により東京山林学校は廃止され、駒場農学校に吸収合併される形で、東京農林学校が新設されました。さらに1890(明治23)年6月に、同農林学校は帝国大学に合併される形で、帝国大学農科大学(1897年に東京帝国大学農科大学、現在の東京大学農学部)が誕生します。欧米列強に追いつこうと、様々な改革と社会変化が起きた時代の様子が、林学の歴史からも垣間見えます。この時代、野外的実習・演習は官林で実施されることが多かったのですが、教育機関が自由に使用できる演習林の誕生を当時の教員・学生は望んでいました。1892(明治25)年12月、帝国大学農科大学の助教授だった本多は、学



「演習林発祥の地」の碑 筆者撮影



浅間山山頂直下のモミの大木と當山教員 筆者撮影



浅間山山頂での造林実習風景・学生に語りかける本多静六(1925年) 東大千葉演習林蔵



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう!

第12回 大学演習林発祥の地 浅間山(せんげんやま) ~千葉県鴨川市清澄~

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員 国立歴史民俗博物館 しばさき しげみつ 柴崎 茂光

生9名を引き連れて房総半島への修学旅行に出かけ、木更津、鹿野山を経て浅間山付近を訪れます。当時は東京大林区署が所管していた山であつたため、地元の案内人に加えて、大林区署や久留里小林区署などの職員も同行しました。すると浅間山付近一帯の天然林は、椎や櫻といった常緑広葉樹、梅や樅などの針葉樹の老齡樹が生育していました。来訪の目的は木材コレクションの採取でしたので、一行は、12月26日に梅と樅の巨木を伐採し、その翌日に円板や材鑑を切り取ります。測樹や年輪推定も行い、伐採した梅は313年生、樅は175年生と判明しました。案内役に見事な美林が残る理由を質問したところ、「かつて伐採した事もあつたが、多くの伐採夫が怪我をし、伐採したにもかかわらず直立したまま倒れないといつた不思議な現象が発生したため、地元住民はこの森を畏れ以後切らなくなった」という回答がありました。

本多が聞き取つた話ではありませんが、「古くから天狗が暮らす」、「清澄寺を8世紀終わりに開山した不思議法師が清澄寺の鬼門(北西)に浅間菩薩を祀つたのが浅間山であり別名富士山とも呼ばれる」、「女性が浅間山に立ち入ると放り出される」など様々な言い伝えも残されています。諸説はありますが、山岳信仰に基づいて長きに渡って地域住民に畏れられ、その結果大々的に伐採されることがなく残されていた

のが浅間山だと考えることができず。こうした特別な山林に、本多は関心を持ちました。さらに浅間山の森林が有する学術的な価値の高さや、東京から比較的近い場所にあつた点にも惹かれ、帰京した本多は、浅間山付近を演習林とする活動に尽力します。遂に1894(明治27)年11月、浅間山を含めた336町4反(333.6ha)の清澄寺周辺の山林が演習林となりました。1897(明治30)年には、奥地の官林(約1,822ha)が演習林に編入され、現在の東大千葉演習林のほとんどが、この時期に誕生することになります。

2018年6月に東大千葉演習林を訪れ、教員の當山啓介さんに浅間山を案内してもらいました。「この演習林が誕生した当初、火入れなども普通に行われていたようで、今よりも原野の多い場所でした。予算もない状況で演習林を設置させた本多に批判の声があつたのも事実ですが、本多は演習林の整備に自ら陣頭指揮をとつて進め

した。東京の駒場で育てた杉や檜の苗木を、汽船と荷馬車で運んで、造林学実習として学生らに植林、手入れをさせました。しかし大半の苗木は長旅で弱り、うまく活着しなかつたという苦勞もあつたようです。創設当初は、演習林内で淡水魚を養殖したり、養鹿するなど、様々なことにもチャレンジしてきました。この他に、演習林が創設される以前に手掘りで掘削した隧道(トンネル)や、かなり古い時代の炭窯跡なども数多く残されています。地域住民を含む先人達と森林との関わりがあつて、現在の姿があります。」と、傾斜の厳しい管理道を歩きながら當山さんは静かに語ってくれました。次世代

にも、演習林の歴史が受け継がれることが望まれます。東大千葉演習林は、一般公開日(例年4月)や、演習林内にある森林博物館資料の一般公開日(例年2月)も設定されています。機会があれば、本多静六や学生たちが歩いた往時の山に思いを馳せながら、訪れてはいかがでしょうか。本稿執筆にあたり、貴重な資料や写真等を快く提供してくださつた東大千葉演習林の教職員の皆様に感謝申し上げます。

※浅間山は学術・教育目的で利用されることがありますが、急傾斜地など危険箇所も多いため、一般には公開されていません

参考文献

- 右田半四郎(1931)古記の拾遺と思ひ出(大日本山林會(編)、明治林業逸史 續編) pp.450-470.
- 根岸賢一郎・丹下健・鈴木誠・山本博一(2007)千葉演習林沿革史資料(6)——松野先生記念碑と林学教育事始めの人々——東京大学農学部演習林報告46: pp.57-121.
- 東京大学千葉演習林(2014)我が国最古の「大学の森」——東京大学千葉演習林のすべて——245pp
- 當山啓介(2017)日本最初の大学演習林「千葉演習林」(本多静六博士を顕彰する会(編)、生誕百五十年記念誌 本多静六—森と公園を愛した人—) pp.8-11.



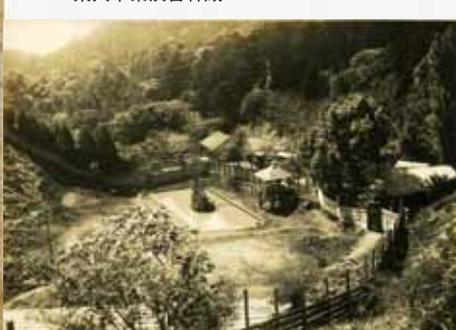
浅間山と集落の様子(中央奥左側)(2018年)筆者撮影



浅間山と集落の様子(中央奥左側)(1933年頃)東大千葉演習林蔵



野獣園での養鹿風景(1929年)東大千葉演習林蔵



しっかりと整備された小屋ヶ尾野獣園(1932年)東大千葉演習林蔵